



第 171 号

二〇二三年十一月二二日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 北井利幸

創立八五周年に寄せて

青柳 正規

一. はじめに

私が橿原考古学研究所（以下、橿
考研）に迎えられて頂いて四年余り、
大変楽しい日々を送っています。来
るたびに調査中の現場を見せて頂き、
ほんやりとしか知らなかった記紀の
世界を実際に尋ね歩くことで、新し
い知識を頂いています。また、末永
雅雄先生以来の素晴らしい伝統が今
もずっと続いており、そういう意味
で日本考古学の現実が実によくわか
るということが大変ありがたく思っ
ております。

私が橿考研に来て何ができるのか。
やはり調査研究の環境を良くするこ
とに少しでも貢献するのが、私の仕
事ではないかと思っています。その
一つの目印になると思うのですが、
大変嬉しいことに科学研究費（以下、
科研費）がこの数年で数倍になり、

総額で八六〇〇万円余になりました。
研究所としてリサーチアクティブな
状況を示す一番の指標と考えていま
す。自身の研究生活が科研費の中
心にやってきたので、そういう点で
所員の方々が調査をやりながら研究
費を活用して研究することが非常に
重要だと考えています。

二. 着任前の橿考研の印象

橿考研に関しては、樋口隆康先生、
菅谷文則先生と委員会や審議会でご
一緒する機会に話を聞いて、おおよ
そのイメージはできていました。奈良
という恵まれた場所で、縄文時代か
ら奈良時代や平安時代、もっと下が
って鎌倉時代、までいろいろな調査を
やっているということも知っていて、
サイト（遺跡）に恵まれて羨ましく
思っていました。

目 次

創立八五周年に寄せて	1
アレクサンダー・モザイク	2
大和の甑二例	4
勝部明生さんを偲ぶ	6
研究会・いのししの会報告	8
計報、ひとの動き、附属博物館展示案内	8

青柳 正規	1
青柳 正規	2
中野 咲	4
橋本 裕行	6
編集者	8
編集者	8

ヨーロッパなどでは昔から、考古
学者を育てるには良いサイトが一番
の栄養であると言われていました。
それが橿考研の場合には最初からあ
るわけです。だからこそ、橿考研に
いた個々の研究者が研究成果を上げ
ているのを素晴らしいと思っていま
した。一方で、私はずっとポンペイ
の調査をやってきて、災害考古学
のように横串で切ったような、世界中
の文化が災害でどのように影響を受
けたか、あるいはそれからどう復興
したかといったことで人々の文化・
文明を考えてきたので、素晴らしい
サイトに恵まれている橿考研の皆さ
んが東アジア全体に貢献してもいい
じゃないかと漠然と思っていました。
もちろん、樋口先生たちがバルミラ
の調査をされていることは知っては
いましたが、やはり特定の場所をき
ちんと調査して理解するにはかなり
の年月と労力があるので、それを一
つのサイトについて実践するほどに
は本格的ではないと頭の中では考え

三. この四年で見えてきたもの

まず、素晴らしいと思ったのは、
行政発掘と学術発掘を両方やってい
て非常に間口が広いということだ。
考古学とは、ある意味で世間から支
援されないとやっていけないフィー
ルドサイエンスだと思います。特に
発掘調査には費用がかかります。そ
うすると、社会への貢献が必要で
すし、市民の方々が考古学を面白い学
問だと考えてくださり、支援して頂
けないと十分なことではできません。
幸いに、橿考研が行政発掘をするこ
とでかなり奈良県全体に貢献してい
るから、もう一方で学術発掘をやっ
ていても、それが研究のための研究
ということではなく、市民の支援も受
けることで、より社会から温かく見
られているのではないかと印象



85周年の所感を語る青柳所長
(所長室にて)

が徐々に形成されてきました。

例えば、二〇二〇年のウワナベ古墳の調査が良い例です。宮内庁と奈良市、檀考研の三者が協力した調査で、日本博の費用で現地説明会を開催し、丁寧一般的な方々に説明ができました。このようなことを、これまでずっと積み重ねてきたからこそ、研究所としての社会還元ができていくわけです。こうした檀考研の間口の広さがよくわかってきたので、これからも、もっと力を入れていかなければいけないと思うところです。

もう一つは、附属博物館を持っていることです。今まで私の頭の中では、調査・研究というのは、最後に報告書や論文を書けばそこで完結だと思っていました。やはり遺物を使って展示をし、一般の方々にその成果がわかるようにすることも、最終目標の一つであることがよくわかったし、それを実現しているのは素晴らしい

しいことだと思えます。

こうして考えると、先ほどの横串でのユニバーサルな考古学の研究成果の発信というものがなくても、違うところで色々と考古学の地平線を広げられるということがわかりました。しばらくは、いま申し上げたような二つのこと、つまり、行政発掘と学術調査を両方手掛けることと、研究成果を論文だけでなく展示という形でプレゼンテーションすることについて、もっと精度を高めれば良いのではないかと感じています。

付け加えれば、公開講座を様々な形で何種類も、いろいろなところでやっているのもとても良いことで、もっと広げて多くの方々にわかっていただきたいと思っています。

四、今後の期待

今後に私が希望することを申し上げます。先頃の桜井茶臼山古墳に関する研究成果などは、戦後の日本の古代史研究の中でも確たるものだと思います。つまり、王権が乱立あるいは並立している状況がずっと紀元後三世紀に継続していたのではなく、三世紀後半には突出した王権が確立していたことを、もの見事に証明したわけです。今回は非常に控え目

な発表でしたが、もっと強く押し出して良いのではないのでしょうか。

そのためには、やはり全国規模の学者たちを集めて大掛かりなシンポジウムをおこなって彼らを納得させ、様々な人が三世紀後半の日本の状況について桜井茶臼山古墳を中心に書いてもらえるようにするだけの発信力をつける必要があると考えます。それは、桜井茶臼山古墳だけでなく、藤ノ木古墳などについても、もっと半島との関係をしつかり組み立てて、韓国の学者たちと一緒に研究することにより、東アジアの当時の文化状況というものをもっと具体化するため、これからやっていきたいと思えます。

最後に、保存科学部門のことについて触れておきます。彼らは今般の富雄丸山古墳の出土品の取り上げとクリーニングで非常に活躍してくれ

アレクサンダー・モザイク

アレクサンダー・モザイクは、ギリシャ・ローマ世界におけるギリシャ絵画を具体的に推測できる資料として、大変重要な役割を果たしている。「尺取虫のようなモザイク」という、

ていますが、これからこの部門はさらに重要になっていきます。人員も増えましたし、少し時間がかかって、将来的に檀考研の中で保存科学センターのようにし、様々なデータの蓄積、そして技術・分析法の蓄積を高めて、考古学会全体に貢献できるようにものにしていきたいという希望を持っています。

檀考研にはハンディキャップのある人のために色々考える人、縄文時代や弥生時代をやる人、あるいは旧石器時代をやる人もいて、それぞれが一騎当千の考古学者です。その人たちがそれぞれに、いろいろなシンポジウムや研究会をおこなって、研究者としての存在感をもっと出して欲しいと思います。シンポジウムの費用がかかるということであれば、皆で資金を集めて、実現できるようにしていきたいと考えています。

青柳 正規

一粒およそ二〜三mm四方の小さなテッセラを並べて作り上げたモザイクで、一人の熟練したモザイク師が作るとして二〇年くらいいけると言われている。一九世紀に発見され、剥ぎ取

られて、現在はナポリの国立考古学博物館に展示されている。

二〇二一年の「ポンペイ展」で出展を予定していたが、コロナ禍により修復作業が大幅に遅れ、現在も博物館の壁にかかったままである。今後、壁から外して水平にして裏側を調査し、さらに反転して本格的な修復に入る計画である。裏面に推定約七㎝厚のモルタルのサポートがついており総重量は約八tである。これがローマ時代のオリジナルのモルタルか、あるいは発見された一九世紀に床から剥がした際に塗ったものかが問題となっている。もし一九世紀のものであれば剥ぎ取ってアルミニウムのハニカムにして軽量化を図るが、ローマ時代のモルタルであれば剥がすわけにはいかず、八tという重さがそのまま残ることになる。

このモザイクは、ポンペイの「ファウノの家」という館にあった。館は広さ約三〇〇㎡で、古代のギリシャ・ローマ世界ではかなり大きな邸宅である。諸説あるが、このモザイクはアレクサンドロス王が東征に出発する紀元前三一三年、トルコのイッソスの戦いの様子を描いたものと考えられている。しかし、アレクサンドロス王が左に寄っており、ダレイオ

ス三世が一番信頼を寄せていた武将がアレクサンドロス王の槍で突き刺されている場面が中心に描かれる。

これは古代絵画としては、非常に変わった主題である。普通であれば、アレクサンドロス王を中心にして主人公としての存在感を示す訳だが、ここでは大変な戦上手な姿としてではなく、あくまでも若く瑞々しい姿で描かれる。この絵は敵側の武将が討たれる場面であり、弱者を中心にしている。このような表現は近世以降にはあるが、古代あるいはルネッサンス期まではあまりみられない構図で大変珍しい。アレクサンドロス王お抱えの画家が描いた原画に基づ



研究集会で語る 青柳所長

いてこのモザイクが写し取られたのではないかと推定されているが、その原画は見つかっておらず、推測の域を出ない。剥落部分は一九世紀末の発見時にすでにこの状態だった。

作品自体は紀元前一二〇〇〜一三〇年頃に作られ、このファウノの家の床に設置された。七九年のヴェスヴィオ山噴火の時にはおよそ二〇〇年経っており、すでにかなり傷んだ状態のまま埋没したと推定されている。

ファウノの家からは、アレクサンダー・モザイクの他にも様々な主題のモザイクが発見されている。それらは、紀元前二世紀後半頃のローマにおけるエジプトへの憧れを示しており、ポンペイだけではなく首都ローマなどでも盛んに用いられた。しかし、アレクサンダー・モザイクのような立派な戦闘図はファウノの家からしか発見されていない。

最後に、我々が二〇〇二年からおこなっている発掘調査について紹介したい。五〇年ほど前のイタリアでは各国がコンチエシオーネ（発掘調査委託）というやり方で調査研究をしていたが、今では二〇年も続く調査隊はずいぶん少なくなった。近年のイタリアでは、発掘で新たな考古資料を獲得することより、博物館な

どに収蔵されているものを再度徹底的に調査し直して、その価値や特質を明らかにすることが重要視されつつあるからだ。

ヴェスヴィオ山の南側のポンペイやエルコラーノでは非常に研究が進んでいたが、我々が調査している北側斜面のソムマ・ヴェスヴィアーナでは、それに比べてほとんど研究が進んでいなかった。

一九三〇年の調査で検出されたローマ時代のコンクリート壁体を、当時の考古学者達は初代ローマ皇帝アウグストゥスの別荘だと考えた。我々の調査が進み、その建築様式が紀元後二世紀であることが明らかとなり、アウグストゥスが亡くなる紀元前一四年以前の建物とは考えられなくなった。ほかの別荘建築にないモニユメンタルな作りであるため、単なる別荘というより、ヴェスヴィオ山に祀られたデュオニソスを崇拝するような儀式の場と考えているが、まだ結論は出ていない。

発掘ではようやく七九年以前のものが出てきており、その七九年から一三〇〜一四〇年後に立派な建物が作られる過程というものを、これから考察していきたいと考えている。

大和の甑二例

一・はじめに

本稿は、大和出土の古墳時代の甑のうち実測図の一部あるいは、写真のみが公表されている二例について、実測図を掲載し、今後の研究の一助とするものである。

二・資料の概要

二例の甑は、ともに外面にタタキを施したいわゆる韓式系土器である。一つは高市郡明日香村所在島庄遺跡第六次調査（調査時は嶋宮伝承地）出土の甑である（図1-1）。公園整備に伴う調査において、飛鳥時代遺構の基盤層（灰黒褐色土）から出土した。このほか同層からは古墳時代中期中葉から後葉の須恵器・土師器も出土している。甑は、写真が図版（図版八）に掲載されているものの、実測図の提示はない。

いま一つは御所市所在南郷遺跡群出土の甑である。井戸井柄遺跡の井戸二区SB〇二から出土した（図1-2）。当該調査は、概要報告や一部の特異な遺物が紹介されているのみである。また、当該文献では、実測

中野 咲

図のみが掲載されており、底部や把手の断面等、細部の情報が図示されていないため、ここで併せて図を提示する。

三・資料の観察

図1-1は、島庄遺跡出土の甑である。底部は平底で、体部は口縁部に向かつて直線的に開く。体部の中ほどには一条の沈線がめぐり、沈線の高さで一对の把手が付加されている。把手は、体部に穿たれた孔に把手の軸を挿入し、体部との接合部に粘土を付加して接合されている。把手の断面形態は円形である。把手には、上端から下端まで貫通するスリット状の切込みが加えられている。また、下面の先端付近には、浅い刺突も施される。口縁端部には内傾する明瞭な面を有する。底面には円形の蒸気孔を穿つ。残存部位が少ないが、中央に円孔を一ヶ所、周辺にやや小型の円孔を七ヶ所配置した一十七の蒸気孔配置が復元できる。体部外面に（二本/cm）のやや粗い縦位平行タタキを施し、体部下端に横位ヘラケズ

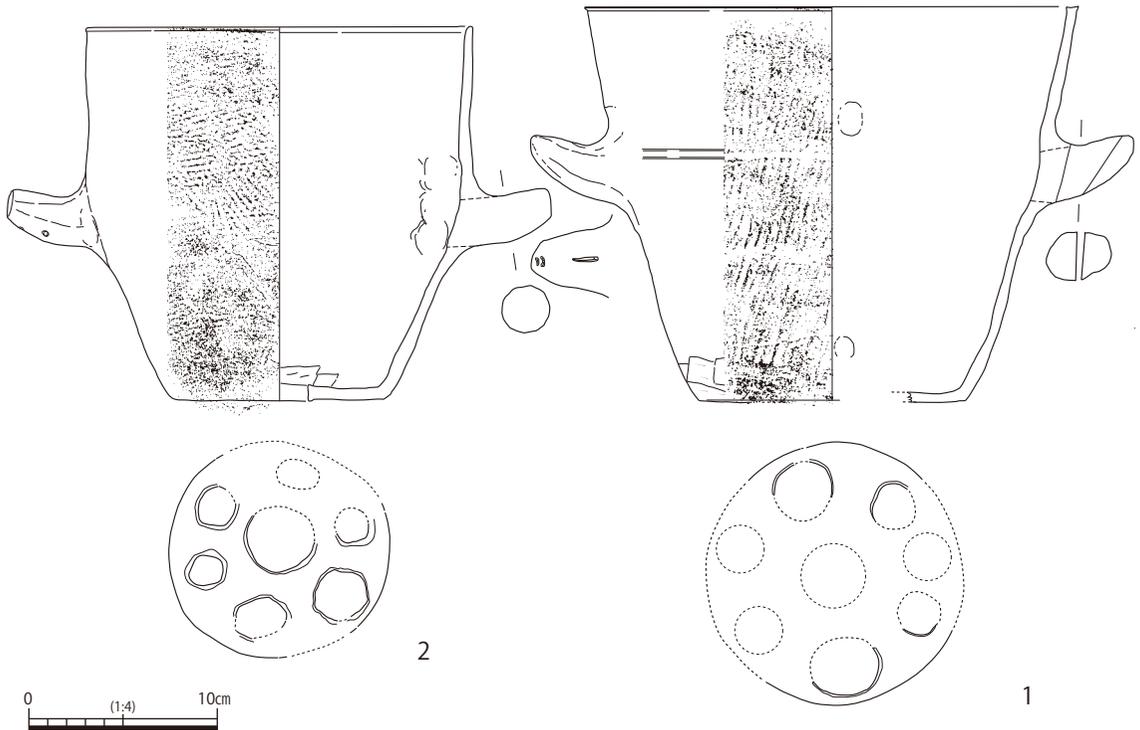


図1 島庄遺跡・南郷遺跡群出土甑（1：新規作図、2：坂2010を再トレース・一部改変。底部を新規作図）

リを加える。体部内面にはわずかに指押さえが残るものの、丁寧なナデを施しており、当て具痕跡などは確認できない。胎土はやや粗く、長石、石英、チャートなどを含む。色調は浅黄橙色を呈し、体部外面には縦長楕円形の黒斑が付着している。口径二六・一cm、底径一四・〇cm、器高二〇・九cm。

図1-2は、井戸井柄遺跡出土の甌である。1と同様に底部は平底であり、体部は口縁部に向かってやや内湾しながら開く。体部に沈線はないが、体部中ほどの高さに一对の把手が付加されている。把手は1と同様に体部へ挿入する方法で接合されている。把手の断面形態は円形で、1のようなスリットはない。下面には円形の刺突が二ヶ所加えられている。口縁端部は、わずかに内傾する面を有する。底面には、1と同様に円形の蒸気孔が一十六の配置で穿たれている。体部外面に格子タタキを施し、体部下端には横位ケズリを加える。内面にはわずかに指押さえが残るものの、丁寧なナデを施しており、当て具痕跡などは確認できない。胎土はやや粗く、長石、金雲母などを含む。色調は橙色を呈する。口径二〇・二cm、底径一〇・九cm、器高一九・

九cm。

四. おわりに

甌は、古墳時代中期に韓半島からの渡来系集団がもたらした新来の器種であり、属性が豊富なことから、時期や故地である韓半島の地域色が反映されやすい。今回新規に作図あるいは一部図を追加したことで、各属性が容易に確認可能となり、甌からみた日韓交渉研究の一助となることが期待される。なお、両者は形態や外面調整などから、馬韓・百済系と判断できる。

また、特筆すべきは、鳥庄遺跡出土甌(1)である。飛鳥・葛城地域の韓式系土器の集成には、1は掲載されておらず、存在がほとんど知られていなかった遺物である。飛鳥地域は、韓式系土器が多数出土することと知られているが、西口壽生氏は飛鳥地域の中でも山田道周辺、飛鳥寺周辺、飛鳥板蓋宮周辺の三箇所に集中するとし、この三箇所の集落を『日本書紀』雄略天皇七年条にある百濟からの渡来人「手末才伎」を住まわせた上桃原、下桃原、真神原に比定している。今回報告した甌の出土した鳥庄遺跡は、飛鳥板蓋宮のさらに南方に位置する。既往の調査では、

古墳時代初頭から集落が継続することが判明している。古墳時代中期初頭には、丸底多孔の土師器甌の出土が確認されており、韓半島的な煮炊器を最も早く受容した集落の一つととらえられる。今回、韓式系土器甌の存在を再確認したことで、改めて鳥庄遺跡における渡来系集団の居住を補強できた。

謝辞 本稿を執筆するにあたって、青柳泰介氏、鶴見泰寿氏のご指導ご助力を得ました。末筆になりましたが、記して感謝いたします。

註

(1) 鳥田隆昌一九七四「四八Dトレンチ」『嶋宮傳承地―昭和四六―四八年度発掘調査概報―』奈良県教育委員会

(2) 坂 靖一九九四「佐田遺跡(南郷・井戸地区)―奈良県遺跡調査概報―一九九三年度 奈良県立橿原考古学研究所 ※現在、「井戸井柄遺跡」と改称されている。

(3) 坂 靖二〇一〇「葛城の渡来人―豪族の本拠を支えた人々―」『研究紀要』第一五号 由良大和古代文化研究協会

(4) 南郷遺跡群出土の甌の底部の追加実

測図は、中野 咲二〇一七「土器の相対年代と系譜」『国家形成期の畿内における馬の飼育と利用に関する基礎的研究』奈良県立橿原考古学研究所にも掲載している。

(5) 当研究所附属博物館の常設展示品であり、博物館リニユーアルに伴う休館の際に観察・追加実測を行った。リニユーアル後も展示中である。

(6) 註3・4文献、寺井 誠二〇一六『日本列島における出現期の甌の故地に関する基礎的研究』大阪歴史博物館

(7) 西口壽生二〇〇二「古墳時代の飛鳥・藤原地域」『あすか以前』飛鳥資料館図録第三八冊 奈良文化財研究所飛鳥資料館

中野 咲二〇〇七「畿内地域・韓式系土器集成」『渡来遺物から見た古代日韓交流の考古学的研究』立命館大学文学部

坂 靖編二〇一六「古墳時代における渡来系集団の出自と役割に関する考古学的研究」奈良県立橿原考古学研究所など

(8) 註7、西口文献参照

(9) 中野 咲二〇一六「大和地域」『集落から探る古墳時代中期の地域社会』古代学研究会二〇一二年度拡大例会シンポジウム発表要旨集

勝部明生さんを偲ぶ

本年四月二六日午後一時二〇分、机の上のスマホが響いた。電話に出ると勝部さんの次女ちこさん。父の明生が亡くなった、と訃報を伝えられた。私は、三年前に檀考研を退職し横浜に帰郷していたため、告別式には参列できないので、後日あらためてお別れを告げにご自宅にうかがうことを約束して電話を切った。

勝部さんとの出会いは、昭和六〇年四月に檀考研嘱託職員として採用され附属博物館に配属された時だった。その後、正規職員として採用され調査課に配属されるまでの二年間、勝部次長（当時）の下で学芸員としての心得をご指導いただいた。

当時の学芸室は、勝部次長の下に、岡幸二郎さんが総括学芸員、以下久野邦雄さん、菅谷文則さん、岡崎晋明さん、嘱託職員として私、学芸補助として須藤聖子さんという構成であった。

昭和六〇年の正規職員採用者は五名、嘱託職員採用者は私の他四名。生まれも育ちも大学も、すべてが関東の出身者は、私一人。他の方々は、

橋本裕行

学生時代に何らかの形で檀考研と接点があり、多少なりとも檀考研の内情を知っていたが、私はまったくの白紙状態。

そんなこともあってか、採用されて間もなく、勝部さんから「橋本君、ちよつと大阪まで呑みに行かへんか」と誘われた。連れて行かれたのは、近鉄布施駅近くの勝部さん行きつけの飲み屋。勝部さんは、店でお好みのおでん（コロ）をつつきながら、「あんな、橋本君、岡さんはな、わしの先輩なんや」と話し始められた。

勝部さんは、昭和九年一〇月四日、島根県出雲市で出生された。県立出雲高校卒業後、昭和三二年に関西大学（以下、関大と記す）文学部史学科に入学、その後大学院へ進学された。昭和三六年八月、関大大学院文学研究科日本史学専攻を修了する前年、昭和三五年八月に大阪市立博物館創設事務室に勤務されている。

大阪市立博物館は大阪歴史博物館の前身。昭和六年大阪城内に竣工した第四師団司令部の建物が戦後大阪市警本部となり、昭和三年その建

物が市警本部から大阪市に返還された。これを契機に市制七〇周年記念事業として建物の歴史博物館転用構想がまとめられ、昭和三五年五月博物館創設事務室が設置された。勝部さんは、その三ヶ月後に大学院に籍を置きながら博物館創設事務室に勤められたことになる。また、同年二月、大阪市立博物館の開館と同時に同博物館主任学芸員に配属された。以後、昭和五四年四月に退館されるまでの間、館藏品ゼロから出発した博物館の運営に尽力された。

「岡さんは、ようぼくのところに来てな、新しくできる檀考研の博物館の構想について、二人でよう話し合ってたわ」。「それがな、末永先生の一声でぼくが檀考研に勤めることになってしまった」。

檀考研附属博物館の開館は、昭和五五年一〇月。それに合わせて開館記念特別展「大和出土の国宝・重要文化財」展が開催された。当時、大学三年生だった私も遙々横浜から展示を見に出かけたことを覚えている。

勝部さんは、昭和五四年五月、檀考研に附属博物館次長として赴任された。新博物館開館までには、一年五ヶ月余りの期間しかなかった。一般的には、基本設計はできあがり、

躯体工事も進捗し、あとは展示品の選定とディスプレイの詰めの作業、および開館記念式典・特別展の準備が残っている段階である。新博物館の開館へ向けての作業は、岡さんから勝部さんへバトンが渡された。しかしながら、お互いの心中には忸怩たるものがあつたことは想像に難くない。

私が博物館に配属された時に感じた学芸室内のなんとも言えぬ雰囲気の一部がそこにあつたのだろう。勝部さんは、そのことをできるだけ早く私に認識させたかった。そこで、私を行きつけの飲み屋に誘い、胸襟を開いて、これまでの経緯を話して下さったと思っている。ここに、「氣遣いの人」と言われた勝部さん的一端を垣間見ることができよう。

勝部さんは、関大・同大学院時代に末永雅雄先生の薫陶を受けた。大学院時代には、関西学院大学から関大大学院院に入学した石野博信さんと寝食・苦楽を共にしたという。石野さんは、昭和八年一月生まれで一歳年上だが、二人はよほど馬が合ったようだ。石野さんは大学院修了後兵庫県で教員となった。その後二人は、末永先生の号令一下で檀考研に転職し再会した。新博物館開館を見

届けた末永所長は一〇月末日で退任され、調査部長の石野さんと博物館次長の勝部さんに檀考研の後任実務を託された。

勝部さんが檀考研在職中に手がけられた特別展に「伊勢神宝と考古学」がある(昭和六〇年春季特別展)。この展覧会は、考古学的視点から伊勢神宮の神宝の伝統性を考え、神宝と

考古資料との関連性について理解を深めることを目的として企画されたもので、当時としては異色であり且つ出色の展覧会であったと思う。勝部さんに同行して、神宮徴古館へ神宝借用のご挨拶にうかがったり、伊勢神宮を正式参拝した時のことが懐かしく思い出される。

勝部さんが最初に発表された論文は、「古代楯と宗教観」(昭和三十三年、『史泉』第九号(上)・第一〇号(下)、関大史学会)で、これは末永先生のご指導のもとで纏められた卒業論文であった。この論文は、後に斎藤忠



(ご遺族提供)

先生が編集された『日本考古学論集 三 呪法と祭祀・信仰』(昭和六一年、吉川弘文館)に再録されている。勝部さんは、学生時代から末永先生の薫陶を受け、古代の武器・武具や威儀具とそれらが有する象徴性に関心をもたれていた。そのような背景があつて、「伊勢神宝と考古学」展を企画されたのだろう。

勝部さんは、平成六年三月に檀考研(副所長兼附属博物館長)を退職され、同年四月に市立五條文化博物館長に就任された。博物館は翌年の開館を目指して準備が進められており、勝部さんの生涯で三つ目の新博物館開館を手がけることとなった。博物館は、展示室が地下に設けられ、

バームクーヘン形のユニークな平面形が注目された。開館準備中の勝部さんを訪ねると「有名な建築家のデザインは、使い勝手が悪くてね」と苦笑い。勝部さんのお気に入り、館内の一角に設けられた茶室。「博物館には、ゆとりと遊びの空間が必要」と。だが、その茶室は、諸般の事情により今はない。自宅から博物館までの通勤時間がかかることもあつて、勝部さんは僅か三年で館長職を辞した。

その後、平成八年から一七年まで、

龍谷大学教授として主に博物館学芸員養成課程の学生の指導にあたられた。

本年八月二〇日午前中、勝部さんのお宅を訪ねた。奥様の八重子さんと長女の理子さんが出迎えて下さり、仏壇に置かれた勝部さんの遺骨と位牌の前で、ひとしきり昔話に花が咲いた。

私事ながら、結婚式の仲人を勝部さんご夫妻にお願いしたこともあつて、以前は毎年一月二日に勝部さん宅へ年始のごあいさつにうかがった。最初の年には、西北大学の王維坤さんが同席された。また、後年には龍谷大学に留学したての王勃さん(中国社会科学院考古研究所)とも出逢った。奥様の話では、西北大学から檀考研に交換研修で訪れた張宏彦さんや錢耀鵬さんを始めとして、来日した多数の中国人研究者をお宅に招いていたとのこと。勝部さんは、根っからの中国好きで、檀考研と西北大学の間の交換研修制度締結に尽力された方の一人でもあつた。

仏壇の脇に唐三彩俑の馬が置かれていた。「この馬を持ち帰るのに難儀したんや」。洛陽博物館長からお土産にといただいた唐三彩俑。箱の中には、レプリカであるという証明書が

入っていたが、帰国時の空港で箱を開けられ、本物と疑われてすつたもんだ。「なんとか持ち帰ることができたんや」。年始の際に勝部さんが語った顛末を思い出す。

こんな会話もあつた。「橋本君、海獣葡萄酒の海獣とはどういう意味だと思ふか。「海獣とはな、海外の動物、つまり舶来という意味やな」。この話は、勝部さんの海獣葡萄酒に関する論文に由来し、後に『海獣葡萄酒の研究』(平成八年、臨川書店)に再録されている。

龍谷大学に移られてからは、暇を見つけては大阪府内の神社を散策し、燈籠と狛犬の資料を集められていた。年始の際に「橋本君、最近狛犬が面白いねん」と・・・。

最後に、奥様の話では、勝部さんは移築した新宅の一室にミニ展示室を設けていたという。そこで、国内や海外で収集した品々を並べられていたそうである。それを聞いて、やはり勝部さんは博物館人であった、と再認識させられた。今もあの世で、末永先生を前にして逸品の展示解説をされていることだろう。

謹んで勝部さんのご冥福をお祈り致します。合掌。

研究集会・

いのししの会

創立八五周年を記念した第三六九回研究集会が令和五年一〇月二二日(日)に研究所講堂にて開催され、青柳正規所長が「アレクサンダー・モザイク」と題して発表されました。研究集会終了後には、正面玄関前で記念撮影をおこない、いのししの会を榎原オークホテルにて開催しました。研究集会には六五名、いのししの会には五八名の参加がありました。(順不同、敬称は略させて頂きました。)

〔奈良国立博物館〕井上洋一、〔明日香村〕森川裕一、〔公財〕由良大和古代文化研究協会〕泉森 皎、〔金峯山寺〕五條永教・池田 淳、〔奈良市埋蔵文化財調査センター〕鐘方正樹、〔友史会〕田中吉満・原口憲次郎・山本哲夫・安藤美津江、〔一財〕榎原考古文化財団〕大西寿江・梅原章一、〔報道関係者〕柳澤伊佐男・関口和哉・沖 真治・篠崎善博・牟田口章人・山下徳子・中村俊介・竹内義治、〔文化資源活用課〕森井順之、〔文化財保存課〕中川智巨、〔特別指導研究員〕稲村達也・右島和夫・田中晋作・小澤 毅、〔共同研究員〕東潮・中井一夫・梅咲直照・福田さよ

子・森岡秀人・福永伸哉、〔研究員〕青柳正規・大峯朝記・西藤清秀・岡林孝作・川上洋一・光石鳴巳・箕倉永子・米川仁一・中村健太郎・小栗明彦・高木清生・北井利幸・東影悠・鶴見泰寿・木村理恵・平井洸史・大西貴夫・米川裕治・岡田憲一・前田俊雄・絹晶 歩・齊藤 希・岩越陽平・辰巳祐樹・西浦 熙・岩崎郁実・小泉翔太・黒澤ひかり・富田樹・蓮井寛子・鈴木裕明・本村充保・鈴木一議・藤元正太、〔関係者〕稲村和子・今尾文昭



研究所玄関前での記念撮影

(着席者左から、右島和夫、森岡秀人、森井順之、森川裕一、西藤清秀、青柳正規、井上洋一、中井一夫、福永伸哉、泉森 皎、岡林孝作)

【計 報】

令和三年七月二九日

研究顧問 杉本憲司先生

(佛教大学名誉教授)

令和四年五月三日

研究顧問 澤田正昭先生

(東北芸術工科大学客員教授)

令和四年八月三〇日

元特別指導研究員 弓場紀知先生

(兵庫陶芸美術館副館長、

石洞美術館館長)

令和五年七月四日

研究顧問 安田博幸先生

(武庫川女子大学名誉教授)

永年にわたり、研究所の活動にご尽力頂きありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

ひとの動き

(異動) 令和五年一〇月一日付

北井利幸 企画学芸部学芸課

学芸係

↓企画学芸部企画課

企画係 指導研究員

木村理恵 企画学芸部企画課

企画係

↓企画学芸部学芸課

学芸係 主任研究員

附属博物館展示案内

◎二〇二三年度 秋季特別展

「古事記編纂者 太安萬侶」

会期：令和五年一〇月七日(土)

～十一月二六日(日)

昭和五四年、古事記の編纂者である太安萬侶の墓の発見により太安萬侶の実在が明らかとなり、位階や本籍地、卒年も確たるものとして認識されるに至ります。太安萬侶の没後一三〇〇年の節目にあたる本年、太安萬侶の人物像を考古学的観点から探るべく、本貫地付近の遺跡をはじめ、火葬墓や墓誌に焦点をあてた展覧会を開催します。近年の都城出土品のほか、奈良時代「律令墓制」の先進地であった県内の火葬墓出土品を通じて、太安萬侶の更なる理解のきっかけとします。



木造太安萬侶神像
〔田原本町指定文化財〕
(多坐弥志理都比古神社蔵)